

以形狀爲名

此盃二重底にして、上底はびいどろなり、その下に龜あつて、平常は盃を手にとつても、此かめうごかず、酒をうくれば、頭ならびに手足皆動搖するなり、ゆへにこれを搖盃と名づく、○下略

〔浮世親仁形氣〕五老を樂む果報親父
扱昔から御酒がお好とて、高蒔繪の大盃を出せば、是よりは茶碗でと望む程に、いかやう共御心まかせと、其日は行儀を改めず、○下略

以人名爲名

〔延喜式〕七賤祚大嘗祭凡供神御雜物者、○中略造酒司所備、○中略小盞六十口、已上各盛

〔和漢三才圖會〕三十一庖厨具杯、○中略

其大者名武藏野、小者名織部、○天正之比、武臣古田織部重能善茶道而始作此形其餘數品不枚舉、

〔橋庵漫筆〕二編一織部盃 盃に織部形といへるもの有て、小盃なり、よつて邊鄙の野人など、盃を

織部と心得し人もありとかや、元豊臣家のとときに、日根野織部正高吉と云し人の、好み申されし形となん、依て織部形といへり、此織部と云は、古織部○古田織部正ならず別人なり、日根野氏は武備調ひ

し人にて、武器の物數寄名人なりとかや、されば武器に名のこれり、

〔水鳥記〕下近郷のもの共そこふかにかせいする事、樽次をりべおどし、の事

そこふかにくまんとたくみ給ひしに、何とかし給ひけん、をりべをひとつとりおとし給ふ、

〔醒睡笑〕三不文字

古田織部の數寄に出さる、ほどの物をば、其道をまなぶもまなばぬも、天然と賞翫し、もてあつかひしゆゑ、中酒に座敷へ用ひられつる盃までも、なべて人織部盃といひふる、さるま、京に三八といふ者あり、扱は盃をばいづれもおりべといふ物ぞと、合點しむたり、あるとき三八が顔あかく、機嫌よささうなるを、人見つけて、そちはあられなくゑひたる體ぞといへば、道理かな今朝のふるまひに、汁の椀のおりべで、つゞけざま三盃のみたるもの、